

熱田神宮 宝物館だより

熱田神宮宝物館

編集 内田雅之

〒456-8585

名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号

TEL (052)671-0852 FAX (052)671-1202

(年6回発行)

6月コーナー展 「工芸の世界」より



《参考》重文 貴徳面 平安時代

もくぞうぶがくめん きとく 木製彩色 面長 21.3cm 面幅 16.0cm 1面 南北朝時代

本面は、朝鮮半島を経て伝来した高麗楽こまがくに属する曲に用いるもので、異国の王の故事を舞にしたと伝えられている。

面貌は瞋目で、眉根を寄せて鼻は高く、眉・口髭・顎鬚じょうもうには獸毛を貼りつけている。本面は近年篤志家から奉納されたもので、当神宮伝世の平安時代制作の舞楽面と比較すると口は堅く結び、同面より抑揚の少ない穏やかな造形となり、宮内庁式部職楽部所蔵の同面に近似する作風となっている。彩色・獸毛は、江戸時代の後補である。

面裏に「正平十二年(1357)□月二日 菊□□光」と南朝の年紀と九州菊池氏を連想させる朱銘が遺されている。

5月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

4月27日(金)～5月29日(火)

(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

—コーナー展「工芸の世界」より—



くろあめじ かびん
黒飴磁花瓶 板谷波山作 1口 現代
高32.3cm 口径19.8cm

裾部は土を見せ、残る部分は全体に鉄釉をかけ、薄肉の葡萄文様を胴全体に施した広口の壺である。全体の姿は肩も張らず端正で、鉄釉のしっとりとした肌あいは、黒飴磁の名にふさわしいものである。本器「黒飴磁花瓶」の名称は、作者自身の命名による。

作者の板谷波山(1872～1963)は、端麗な姿と滋潤な彩色、秀れた薄肉の彫刻文様で知られ、我が国陶芸界の第一人者として典雅な意匠作品を数多く発表した。理想とする作品制作のためには一切の妥協を許さず、昭和28年、陶芸家として初の文化勲章を受章した人物として知られている。



ちゅうてつとりとうろう
県文 鑄鉄釣燈籠 1基 総高31.1cm 江戸時代

筒型の火袋に格子を透かし、円形の台に3本の脚をつけている。笠は八葉形で、庇の先端をやや上向きとし、各葉の間に小さな突起が施されている。頂きには宝珠形の釣環台をつけ、そのまわり三方に猪の目形の透かしを施して燈明の煙出しとしている。片面開きの扉一枚を除き、笠から脚まで全体を一つの鑄型で鑄出している。

底部に「奉寄進熱田大神宮□□籠 春日井郡□□魚住次右門 正保四年五月⁽¹⁶⁴⁷⁾吉日」の陽鑄銘がある。

その他の主な展示品

◎重文 ○県文

《書跡・古文書》 ○勸進沙門清徳尾州熱田社幹縁疏并序 ○法華經安樂行品 織田信長朱印状 他

《絵画》 熱田馬の塔-伊藤君樵筆- 舞楽神事図-山田秋衛筆- 醉笑人神事図-石川英鳳筆- 他

《工芸》 八雲琴 七玄琴 色々威具足

《刀剣》 ◎太刀銘国友 ◎劔銘包利 ○脇指銘 吉光 龜王丸(号蜘蛛切丸) 太刀銘千手院 他

《コーナー展示 -工芸の世界-》 ◎木造舞楽面 崑崙八仙・納曾利 ◎黒漆根古志形鏡台 ◎金銅装唐鞍

○神事面 壮年・若人(乙) ○瑞花双鳳文八稜鏡 ○青貝梨子地釘抜紋鞍 西山道遥-平櫛田中作- 他

6月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

6月1日(金)～6月26日(火)

(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

—コーナー展「神宝」より—



おんかんむり

御冠 (貞享3年御装束) 1頭

江戸時代

冠高 18.5cm 幅 14.4cm

額と磯は厚手の和紙を重ねて漆で固め、さらに薄絹で覆い、黒漆で仕上げる。巾子及び纓は無紋で仕立て、黒漆を塗る。

冠箱は三脚の桧製曲物箱で、紐金具に五七桐紋を据える。冠箱底部に「公方綱吉御再興」、及び同裏に「貞享三丙寅年閏三月六日」の墨書を遺しているところから、貞享3年の当神宮御遷宮にあたり、將軍綱吉より当神宮御祭神の御神宝として調進された3頭(二・三・五之御前)の内の一頭とわかる。



にしきのおんゆぎ

錦御鞆 (皇大神宮撤下神宝) 附 矢 20本 1腰 現代

背板部分にかけて長くなる木製筒型の容器に、唐花唐草文を整然と揃えた赤地錦で包み、両側上下に金銅蝶形座金の鑲が打たれている。鑲には鞆を負うための四条の紫組の腰緒が取り付けられている。

附である20本の矢はいずれも漆を摺り込んで磨き上げた拭篋で、箬は朱漆を塗って箬巻を表現している。羽根は烏羽の二枚矧ぎとし、鏃は柳葉形である。

本御料は、明治42年に執り行われた第57回式年遷宮の際、皇大神宮の御神宝として調製され、昭和28年に撤下されたものである。

その他の主な展示品

◎重文 ○景文

《書跡・古文書》 ○「熱田太神宮」神号-後水尾天皇宸筆- ○寛永十三年熱田万句 ○極細字法華経 他

《絵画》 日本武尊草薙之図-忠香筆- 少彦名大明神像-織田杏齋筆- 熱田三面大黒摺繪 他

《工芸》 ○大鈴 鳥居文鏡 蓬菜鏡 能面(延命冠者 千尉) 潮吹面 日本武尊熊襲討伐絵手付水指

《刀剣》 ◎太刀 無銘(伝真長) ◎太刀 銘宗吉作 太刀 銘雲次 短刀 銘備前国住長船祐定 他

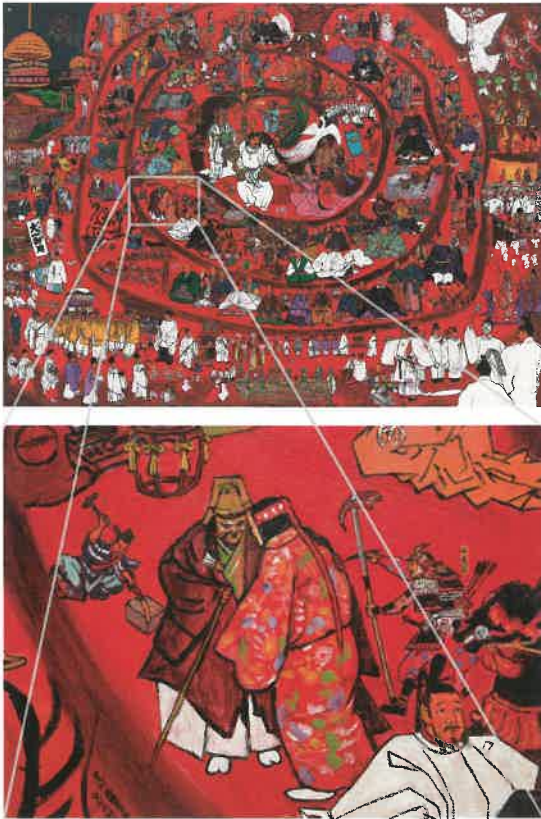
《コーナー展示 「神宝」》 ◎錦包挿鞋 ◎黒漆根古志形鏡台 ◎黒漆菊亀甲蒔絵冠箱 ◎朱漆弓

御櫛笥 御鏡附轆轤篋 金銅造御太刀 御胡籬 錦御衣 青纈纈綿御衣 陶猿頭形御硯 紫羅御裳 他

—展示品より—

熱田神宮にまつわる神々と偉人たち（その7） ～悪ってワルもの??～

「熱田神宮 創祀千九百年」 斎藤吾朗筆



物語』巻十一に記されています。戦場において源氏方の美尾屋十郎が落馬した折、長刀を手にした平氏方の武士と組討ちになりました。その際、平氏方の武士は十郎の兜の鍔を何度か掴み、4度目にしてその鍔を兜鉢から引きちぎってしまったといいます。その余りにも怪力に十郎は仲間の馬の陰に逃げ延びたところ、鍔を引きちぎった平氏方の武士はこう名乗ります。「日来は音にも聞きつらん、今は目にも見給へ、これこそ童童の呼ぶなる上総の悪七兵衛景清よ」ここで、ようやく平氏方の怪力の持ち主が景清であったことが判明します。長刀を手にし、穂先に鍔を掛けて名乗っている景清の雄姿が描かれています。

この景清、壇ノ浦の戦いでも戦死することなく余命を過ごし、一時は頼朝が母方の実家である熱田神宮に立ち寄るのではないかと考え、当神宮近くに潜んだとも言われます。残念ながら晩年目を煩い盲目となってしましますが、ヒーローであったが故、全国各地に景清伝説が遺るとともに、後世、歌舞伎・能楽・謡物でも「景清」の名称で演目が制作され、現代でも演じられ、その姿が描かれています。

さらには、景清には痣があり、その痣が所蔵刀に移り、何度磨ぎあげても再び同じ場所に痣のように浮き出てくる刀があり、後世その刀が「痣丸」と号され、現在は縁あって、当神宮が所蔵しています。



景文 脇指無銘(号痣丸) 鎌倉時代

「悪」という文字を見ると、どうもあまり良い気持ちにはなれないのが、今に生きる私どもの感覚です。「悪人」・「悪魔」・「極悪非道」・「悪口雑言」・「悪意」・「罪悪感」etc… しかし、一度原点に戻って辞書を紐解いてみることにしましょう。

『広辞苑』によれば、「われわれにとって有害な自然および社会の現象」、「道徳に反する意志や行為」、「邪気」の他、「ただけしく悪強いことを表す」とあります。そう、「悪」には「強い」や「優れている」という意味もあるのです。

今回取り上げる人物は「強い」という意味の「悪」がとってもお似合いな「平景清」という平安～鎌倉時代の武士です。

景清は、「平」姓で知られますが、本来は藤原行家秀郷の流れを受け、伊勢藤原氏、伊藤上総介忠清の七男であったことから、「上総七郎」、また官職名より「兵衛尉」とも称されていました。

彼の名が世に知られたのは、治承・寿永の乱(所謂「源平合戦」、屋島の戦い)においての武勲です。屋島の戦いと言えば、船中の女房がかざす扇を射抜く那須与一という源氏方の武士の逸話が有名ですが、他方では平氏方の武士、景清の勇猛さが『平家

「ご縁」という言葉の重みを感じる逸話です。

(以下次号)